Osaka University Knowledge Archive

Title	インドネシア日系人の言語選択の実態とその要因
Author(s)	松尾, 慎
Citation	大阪大学言語文化学. 2004, 13, p. 83-97
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/77929
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

インドネシア日系人の言語選択の実態とその要因*

松尾 慎**

キーワード：インドネシア日系人、家庭内言語選択、言語選択規定要因

This study focused on female Japanese immigrants to Indonesia who married Indonesian men and lived in a multicultural and multilingual society in Indonesia.

The purpose of this paper is twofold: (1) to make clear the status of language choice specifically in Japanese immigrants to Indonesia, and (2) to understand the factors which contribute to those choices.

A written questionnaire was used to gather data for the study. Informants are members of a Japanese women's association in Indonesia. 64 questionnaires were collected.

Besides the participants' biodata, several aspects were solicited: language choice according to members of a family, oral proficiency of the informant and her husband, awareness of ethnicity, adaptation to Indonesian society and the informant's social network. Language choice was a multiple choice selection among Indonesian, Indonesian regional dialects, Japanese and English. A statistical analysis was conducted for the survey results.

Results of language choice of Informants to members of a family are as follows.

(1) In almost all cases only Indonesian was chosen for speaking to parents in law.

(2) 60% of informants chose bilingual use of Japanese and Indonesian for speaking to their husband.

(3) About 68% of informants chose Japanese and Indonesian for speaking to their children.

---

* Language Choice among Japanese Immigrants to Indoneshia (MATSUO Shin)

** 東海大学文学院日本語文学系（台湾）

(4) Rate of choice of Japanese for speaking to grandchildren is lower than that for speaking to children.

Factors that were found significant for the informants' language choices are as follows.

(1) Oral proficiency

The higher the oral proficiency of a husband is in Japanese, the lower the rate of choice of Indonesian and English for speaking to a husband is and the higher the rate of choice of Japanese for speaking to a husband is. The higher the oral proficiency of an informant is in Indonesian, the higher the rate of choice of Indonesian for speaking to children is. The higher the oral proficiency of an informant is in English, the lower the rate of choice of Indonesian for speaking to children is.

(2) Adaptation to Indonesian society

If an informant adapts herself well to relatives, the rate of choice of Indonesian for speaking to children is high. If an informant doesn't adapt herself well to relatives, the rate of choice of Japanese for speaking to children is high.

(3) Ethnicity of a husband

If a husband is Chinese-Indonesian, the rate of choice of English for speaking to a husband is high and that of choice of Indonesian is low. If a husband is Chinese-Indonesian, the rate of choice of Japanese and English for speaking to children is high and that of choice of Indonesian is low.

1 はじめに

約2億350万人の人口（2000年国勢調査結果より）を抱えるインドネシアは、250以上とも言われる様々な民族によって構成され、言語の数も250以上に及んでいる（舟田1997：73)。インドネシアには、ジャワ人やスンダ人、バリ人などのようないわゆる原住民族だけでなく、中国、インド、アラブ地域等からの移民とその末裔たちが居住している。1945年にインドネシアという国が誕生し、1945年憲法15章36条においてインドネシア語が国語と規定されて以来、インドネシアの人々は、国民統合のシンボル、また多民族間のコミュニケーション手段として、インドネシア語を共通のことばとしている。

また、インドネシアを構成する多様な民族の言語の中で、ジャワ語、スンダ語、バリ語などの原住民族の言語は、憲法で地方語としてその地位を認められ、公教育の場で教えられているし、日常的にも使用されている。中華系の場合は、福建語や客家語などの中国地方語、マンダリン[1]を使用している家庭がある（松尾 2003）。

本論文では、この多文化・多言語社会に暮らす日系人に焦点を当てた。平成13年の海外在留邦人数調査統計（外務省ホームページ）によると、在留届が提出されている日本人の総数は、11,366名にのぼる。その内訳としては、3ヵ月以上の滞在者で、永住者ではない日本人が10,607名、インドネシア政府より永住権を認められている日本国籍保有者が、759名となっている。永住権を認められている日本人の多くは、インドネシア人男性と結婚している女性である。本論文の研究対象である「インドネシア日系人」とは、インドネシア人男性と結婚しているインドネシア在住の日本人女性、または、インドネシア人男性と結婚し、インドネシア国籍を取得しているインドネシア在住の日本出身女性である。

こうした背景を踏まえた上で、本稿では以下の2点を明らかにすることを目的とする。

① インドネシア日系人の家庭内における言語選択の実態

② インドネシア日系人の家庭内における言語選択に影響を与えている要因

2　先行研究と本研究の意義

これまで多言語社会に暮らす移民の言語選択や移民社会における言語シフトについては、社会言語学的観点から様々な調査・分析が行われてきた。移民であるブラジル在住日系人の言語シフトと言語選択を研究対象とした松尾（2001）では、アンケート調査とフィールド調査の結果に基づき、ブラジル日系人の言語選択と言語シフトが論じられている。ブラジル日系人の場合、1世同士で結婚していれば、夫婦の会話は日本語になり、子どもに対しても普通は日本語を使用することが多く、日本語がもっとも選択されているのは家庭内であることが明らかにされている。ブラジルに移住した日系人は、家庭の中に日本的環境を残しながら世代を経て徐々にブラジル社会に適応していくことになる。

また、松尾（2003）では、ジャカルタ、メダン、ジョグジャカルタでのアンケート調査に基づいてインドネシア華人社会における言語選択と言語シフトが論じられている。結果として、調査地によって、インドネシア語やマンダリンや中国地方語の選択割合に

---

[1]一般的に「中国語」と呼ばれている言語変種は、中国では「普通話」、台湾では「国語」と呼ばれている。インドネシアでは、中国系、台湾系、双方の「中国語」教育が行われていたため、本稿では、総称として「マンダリン」を使用する。

大きな相違が見られた。また、インドネシア華人の多くは、華人同士で結婚することが多く、マンダリンや中国地方語がもっとも選択されているのは家庭内であった。

以上の先行研究で調査の対象となったブラジル日系人、インドネシア華人と、本論文で焦点を当てるインドネシア日系人は、当該社会における少数者であるという共通点を持つが、決定的な相違点がある。それは、インドネシア日系人の場合、配偶者が自分と同じ日系人ではないということである。したがって、インドネシア日系人は、家庭の外ばかりでなく、家庭内においても日本とは異なる習慣や暮らし方に身を置くことになる。その習慣も民族や宗教の相違によって様々である。例えば、イスラム教徒のインドネシア人と結婚した場合、原則的にイスラム教に改宗し、断食、一日5回の礼拝、豚を食べないなどの生活の変化がもたらされる[2]。また、夫と共有する言語能力によって、言語選択のパターンが多様なものとなる。例えば、夫の日本留学中に日本で知り合った場合には、当初夫との共通語が日本語で、アメリカ、オーストラリアなどお互いの留学先で知り合った場合には、当初夫との共通語が英語であることが多いだろう。その共通語もインドネシア滞在が長くなれば、変化する可能性がある。また、夫の両親、兄弟、親戚は日本語を話さないことが多い。

このような特徴を持つインドネシア日系人の言語選択を調査した先行研究はこれまでになく、異なる特徴を持つ日系人の言語選択に焦点を当てることで、移民の言語使用に関する社会言語学的研究領域に新しい知見を提示することができるであろう。

3 調 査

3．1．インフォーマント

インフォーマントは、インドネシア人男性と結婚している日本出身女性の会、Aの会（仮称）の会員で、ほとんどがジャカルタとその近郊に居住している[3]。Aの会は、インドネシア男性と結婚し、ジャカルタ首都圏を中心としてインドネシアに在住している日本出身女性の情報交換、親睦や交流の場として1997年6月に発足した。2003年2月現在の会員数は226名である。会員全員が第二次世界大戦後にインドネシアに移り住んでいる。1950年代、60年代には、インドネシアからの戦後賠償留学生が多く日本で学んでいた。この留学生の中には日本人女性と結婚する人が少なからずいた。Aの会会員の中に

---

[2]ただし、こうしたイスラム教の習慣の取り入れ方は、インドネシア人イスラム教徒の間でも異なるので、日系人イスラム教徒の間でも、生活の仕方が異なってくる。

[3]本研究のインフォーマントには、インドネシア人女性と結婚してインドネシアに居住している男性、バリ島在住の日系人、少数ではあるが、第二次世界大戦に従軍し、そのままインドネシアにとどまった元日本兵の子ども、孫たち等が含まれていない。また、Aの会会員の社会生活状況、とりわけ経済状況に関しての詳細な調査は行っていない。したがって、本研究のインフォーマントは、必ずしもインドネシア日系人を代表しているとは言えないことを断っておく。

も戦後賠償留学生と結婚してインドネシアに移り住んだ女性が多数含まれている。一方、1990年代以降にインドネシアに移住した会員の中には、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド等への留学中に夫と知り合った人が少なくない。

3．2．調査方法

調査方法としては、アンケート調査とインタビュー調査を併用した。アンケート調査は、Ａの会を通して郵送し、回答は筆者宛に返送してもらった。アンケートの送付方法は、Ａの会が会報を発送する際、趣意書、アンケート用紙、切手を添付した返信用封筒を同封してもらうこととした。226名の会員の中から200名の会員に送付してもらい、アンケートに対する回答があったのは64名である。回答は無記名であるが、直接話を聞かせてもらえる人には、名前と連絡先を書いてもらう欄を設け、電話によるインタビュー調査も一部併用した。インタビューの使用言語は日本語である。

3．3．調査項目

アンケートでは以下の項目について質問した。

①言語選択　②会話能力　③言語継承意識　④インドネシア社会に対する適応

⑤日本・日本人との接触頻度　⑥個人データ

以下、順に説明を加えたい。

①　言語選択

インフォーマントからインドネシアの家族に対する言語選択と家族からインフォーマントに対する言語選択の双方について質問した。調査対象とした家族は、義父、義母、夫、子ども、孫であり、対象言語として、インドネシア語、インドネシア地方語(以下、「地方語」とする)、日本語、英語[4]を挙げた。松尾（2003）における方法と同様、それぞれの言語に関して、「いつも使用する」、「ときどき使用する」、「使用しない」から選択してもらった。

②　会話能力

インフォーマントの会話能力とインフォーマントの夫の会話能力について質問した。インフォーマントの会話能力に関しては、インドネシア語、地方語、日本語、英語の能力を質問し、夫に対しては、これらの能力に加えてマンダリンの能力も質問した。会話能力の判断は、インフォーマントに委ね、その判断基準として、松尾（2003）での基準

---

[4]中華系の中には、マンダリン、中国地方語を使用している家庭もある。しかし、対象言語として加えると非中華系の家庭にとっては意味のない選択肢になってしまう。アンケート紙面の構成上の問題もあり、マンダリン、中国地方語は対象言語に加えないこととした。

を簡略化したものを使用した。会話能力は5段階に分けられ、1がもっとも低いレベル、5がもっとも高いレベルである。判断基準は以下の通りである。

1．「こんにちは」、「ありがとう」などの挨拶程度まで。

2．「何時ですか」、「今日は、どこに行きますか」などの非常に単純な文レベル。

3．日常的な話題を簡単な言い方で言える。例.「昨日の夜、晩ごはんを食べに行きたかったです。でも、残業があったので、行くことをやめました」。

4．むずかしいトピックについて、自分の意見や考えを表明することができる。また、日常的な話し方に加えて、あらたまった話し方もできる。しかし、あまり早く話されると理解できない。

5．ネイティブ・スピーカー、母語話者レベルかそれに非常に近いレベル。

③ 言語継承意識

言語継承意識に関しては、子どもや孫に日本語を継承する希望があるか否かを質問した。

④ インドネシア社会に対する適応

親戚行事に溶け込めているかどうかについて質問した。アンケート調査前に日系人女性に対して実施したインタビューにおいて、インドネシアでは、一般に親戚同士が集まる機会が多く、それに溶け込めているかどうかが、インドネシア社会に対する適応の一つの指標になるとの指摘を受けたためである。また、亡くなったときの埋葬場所も日系人同士の話題に上ることがあるとの指摘で質問項目に加えた。

⑤ 日本・日本人との接触頻度

インドネシアにおける仲の良い友人に占める日本人の割合と、訪日の頻度を質問した。

⑥ 個人データ

生年、夫と出会った国、結婚した年、インドネシアに住み始めた年、国籍（帰化した人は帰化した年）、職業、宗教に関して質問した。

3．4．分析方法

本稿の目的は、言語選択の実態とその背景要因を明らかにすることである。そのために、アンケート調査で明らかになった言語選択の実態をまず提示する。本論文では、言語選択に関し、インフォーマントから家族の成員に対する言語選択のみを取り扱うこととする。続いて、アンケート調査の各項目と言語選択の実態との関係について、統計を用いた量的手法によって分析、考察する。調査においてはインタビューも行っているが、本稿では量的分析の結果を提示するにとどめ、インタビュー調査結果の分析に関しては稿を改めたい。

4　家庭内言語選択の実態

4．1．家庭内言語選択の概観

表1は、インフォーマントが家族に対してどのような言語を選択しているかについての結果である。各言語の選択状況は「1＝いつも使う、2＝ときどき使う、3＝使わない」で表されている。したがって、例えば、子どもに対してインドネシア語をいつも使っているインフォーマントは30名、ときどき使っている人は14名、使っていない人は9名となる。合計がインフォーマント全体の64名と一致していないのは、子どもの有無が関わるためである。

表1　インフォーマントの家族に対する言語選択（単位＝人数）

話し相手	インドネシア語			地方語			日本語			英　語		
	1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
義　父	23	1	1	0	2	23	1	2	22	2	1	22
義　母	31	2	0	0	4	29	0	0	33	2	1	30
夫	33	12	10	1	3	51	26	15	14	8	12	35
子ども	30	14	9	0	3	50	29	16	8	1	15	37
孫	12	2	1	0	1	18	2	11	6	1	7	11

地方語は家庭内で、誰に対してもほとんど使用されていない。ジャカルタでは、様々な地方語を背景に持つ家庭が混在しており、ジャカルタ市民の共通語であるインドネシア語が家庭内の生活用語としても普及しているのであろう。また、インフォーマントである日系人に言語習得のための過剰な負担を強いないように、義父母や夫が地方語の使用を控えている可能性もある。以下、対話者別に結果を考察していきたい。

4．2．義父母に対する言語選択

義父、義母に対してはほとんどインドネシア語のみが選択されている。

4．3．夫に対する言語選択

表2　インフォーマントの夫に対する言語選択のパターン（単位＝人数）

イ語[5]のみ	日本語のみ	イ語・日本語	イ語・日本語 地方語	イ語・日本語 英語	イ語 英語	その他
6	5	20	4	9	6	5

[5]イ語は、インドネシア語のことである。以下同様。

夫に関して回答があったのは、64名中55名であった。記入のない9名の夫はすでに亡くなっている可能性が高い。初期の戦後賠償留学生は相当の高齢になっているためである。

表1から夫に対してインドネシア語を選択していない人は10名、日本語を選択していない人は14名と少数派であることが分かる。また、表2は夫に対する言語選択のパターンをインドネシア語と日本語を中心にまとめたものである。表2によればインドネシア語のみの選択は6名、日本語のみの選択は5名である。夫に対して複数の言語を選択しているインフォーマントが多く、インドネシア語・日本語・英語の併用選択者は9名、インドネシア語・日本語・地方語の併用選択者は4名、日本語とインドネシア語の併用選択者は20名、インドネシア語と英語の併用選択者は6名だった。つまり、33名（60.0%）のインフォーマントが夫に対しインドネシア語と日本語を併用していることになる。この33名のうち「夫と知り合った国はどこか」という質問に対して、29名から回答があり、22名（75.9%）が日本で知り合っていることが明らかになった。

4．4．子どもに対する言語選択

子どもに対する言語選択に関して回答があったインフォーマントは53名である。表1によると、子どもに対して、インドネシア語をまったく選択していないインフォーマントは9名、日本語をまったく選択していないのは8名と少数派である。このことから、子どもに対して、インドネシア語と日本語が併用されるのが一般的であることが分かる。

表3　インフォーマントの子どもに対する言語選択のパターン（単位＝人数）

イ語のみ	日本語のみ	イ語・日本語	イ語・日本語 英語	イ語・日本語 地方語	4言語す べて選択	その他
6	6	23	11	1	1	5

表3は子どもに対する言語選択のパターンをまとめたものである。インドネシア語のみで話し掛けているインフォーマントは6名、日本語のみも6名である。インドネシア語と日本語の2言語のみを併用しているインフォーマントは23名にのぼり、インドネシア語・日本語・英語の3言語併用選択者は11名だった。また、インドネシア語・日本語・地方語の併用選択者は1名、4言語すべてを選択している人も1名いた。つまり、36名（67.9%）のインフォーマントが子どもに対してインドネシア語と日本語を共に選択していることになる。子どもに対して日本語をいつも使用しているインフォーマント29名のうち、インドネシア語もいつも使用しているのは8名、ときどき使用しているのは12名、使用していないのは9名となっている。したがって、子どもに対して、日本語を主

体に選択しているインフォーマントが、子どもがいるインフォーマント（53名）全体の39.6%（21名）にのぼる。逆に、子どもに対してインドネシア語をいつも使用しているインフォーマント30名のうち、日本語をいつも選択しているのは8名、ときどきが14名、使用していないのは8名である。したがって、インドネシア語を主体に選択しているインフォーマントも全体の41.5%（22名）にのぼる。このことから、子どもに対し、日本語選択を主体とするインフォーマントとインドネシア語選択を主体とするインフォーマントに大きく2分されることが明らかになったと言えるだろう。

4．5．孫に対する言語選択

孫のいるインフォーマントは19名と少ないが、孫に対する言語選択は子どもに対する言語選択とはかなり異なっている。日本語の選択割合が低く、インドネシア語の選択割合が非常に高い。実際に、孫に対して日本語のみで話し掛けているインフォーマントは一人もいない。子どもに対する日本語の選択割合と孫に対する日本語の選択割合との間でカイ2乗検定を行ったところ、有意確率が0.4%（カイ2乗値11.161・自由度2）となった。したがって、子どもに対してよりも孫に対してのほうが日本語の選択割合が低いことが統計的（有意水準1%）に明らかになった。このことから、子どもに対しては日本語がある程度継承されているものの、孫に対しては、あまり継承されていないことが分かった。この結果は、ブラジル日系人における日本語からポルトガル語への世代間言語シフトを論じている松尾（2001）の結果に類似していると言える。

4．6．言語選択の実態のまとめ

以上の結果をまとめると、家庭内で単一言語のみを使用しているインフォーマントは少数派で、インドネシア語と日本語を併用しているインフォーマントが多いこと、さらに、インドネシア語、日本語、英語の3言語を使用しているインフォーマントがかなり存在することが明らかになった。

なお、本調査で、言語選択の対象にはあげていなかったマンダリンに関して、3名のインフォーマントが自ら、アンケート用紙の余白に、使用していることを記述していた。3名とも夫は華人である。2名は夫や義父母に対してマンダリンを選択している。この2名は、中国留学中に知り合った人1名、夫が日本留学中に知り合った人1名である。また、もう1名は電話によるインタビューの際、マンダリンに加えて中国地方語である客家語も選択していると回答した。夫と知り合ったのはアメリカ合衆国で、マンダリンと客家語はインドネシアに来てから覚えたとのことである。

5　言語選択の要因

本章では、アンケート調査で質問した各項目と言語選択の関係に関して統計的分析を加えていきたい。

5．1．会話能力

表4　夫に対する言語選択と会話能力の関係

	インドネシア語選択	日本語選択	英語選択
インフォーマントのイ語能力	22.7%	56.4%	15.9%
インフォーマントの英語能力	72.4%	5.4%	有意（0.1%）
夫の日本語能力	有意（0.4%）	有意（0.0%）	有意（0.3%）
夫の英語能力	16.1%	78.2%	59.2%

表5　子どもに対する言語選択と会話能力の関係

	インドネシア語選択	日本語選択	英語選択
インフォーマントのイ語能力	有意（0.1%）	10.2%	69.4%
インフォーマントの英語能力	有意（2.8%）	5.2%	8.2%
夫の日本語能力	有意（1.3%）	20.3%	29.8%
夫の英語能力	96.7%	94.0%	35.8%

表4、表5は、夫に対する言語選択、子どもに対する言語選択と会話能力に関し、Kruskal Wallis検定[6]を行った結果をまとめたものである。会話能力に関し、家庭内で地方語はほとんど使用されていないので、地方語は対象外とした。また、インフォーマントの日本語能力と夫のインドネシア語能力はほぼ全員が最高レベルの5であり、分析の対象とはしない。

結果として、夫に対する言語選択に関し、夫の日本語能力がすべて有意となった。したがって、言語選択にもっとも影響を与えているのは、夫の日本語能力であることが明らかになった。夫の日本語能力が高ければ、インドネシア語の選択割合と英語の選択割合が低く、日本語の選択割合が高い傾向にある。また、インフォーマントの英語の会話能力が高ければ、英語選択の割合が高い傾向にあることが分かった。この結果、日系人

[6]Kruskal Wallis検定は、例えば「夫に対するインドネシア語選択とインフォーマントのインドネシア語能力」との関係を「インフォーマントのインドネシア語能力にかかわらず、夫に対してインドネシア語を選択している割合は等しい」という仮説を立てて行う検定である。本研究では有意水準を0.05（5％）とする。したがって、検定の結果、有意確率が5％未満になれば、仮説は棄てられ、インフォーマントのインドネシア語の会話能力によって夫に対するインドネシア語の選択割合は異なることが明らかになる。

のインドネシア語習得の度合いにかかわらず、夫の日本語能力が高ければ、一般的に夫婦の共通語は日本語になる傾向があることが分かった。

また、子どもに対する言語選択に関しては、インフォーマントのインドネシア語と英語の会話能力、夫の日本語の会話能力とが影響を与えていることが明らかになった。インフォーマントのインドネシア語の会話能力が高ければ、インドネシア語の選択割合が高く、英語の会話能力が高ければ、インドネシア語の選択割合が低い傾向にある。一方、夫の日本語の会話能力の差異は、インドネシア語の選択割合に影響を与えていることが統計的に証明されたものの、会話能力の高低と選択割合に必ずしも正、あるいは負の相関関係はみられなかった。具体的に言えば、夫の日本語の会話能力が1であるより、4である場合にインドネシア語の選択割合が高く、4であるより5である場合に選択割合が低くなっている。

子どもに対する日本語の選択に関しては、インフォーマントのインドネシア語能力、英語能力とも影響を与えていない。つまり、インフォーマントのインドネシア語の会話能力が高ければインドネシア語の選択割合が高いが、これは同時に、日本語の選択割合が低くなることを意味してはいないのである。日系人の子どもに対する日本語の選択は、インフォーマントのインドネシア語習得とは関係がない。日系人の子どもに対する日本語選択にかかわる要因に関しては以下で考察する。

5．2．言語継承意識

「お子さん、お孫さんに日本語を継承したいと思いますか」という質問に対し、「はい」が51名、「いいえ」3名、「分からない」2名で、無回答が8名であった。結果として、本調査で質問された言語継承意識に関して言えば、言語選択に対して統計的に有意な影響を与えていないことが明らかになった。

5．3．インドネシア社会に対する適応

インドネシア社会に対する適応に関しては、親戚行事に溶け込めているかどうかに対する回答に基づいて分析したい。インドネシアでは、一般に親戚相互のつきあいが非常に密である。もともと兄弟の数が多いことに加えて、親戚行事が頻繁に行われるため、日系人にとっては、親戚行事に溶け込めるかどうかはインドネシア社会への適応をはかる上で、重要な分岐点となる。本調査では、溶け込めているかどうかの選択肢として「ほとんど溶け込んでいる」、「まあまあ溶け込んでいる」、「あまり溶け込めていない」、「すぐにでも自宅に帰りたいと感じる」を挙げた。表6はその結果である。概ね溶け込んでいるインフォーマントが多いことが分かる。

表6　親戚行事に溶け込めているか

ほとんど溶け込んでいる	まあまあ溶け込んでいる	あまり溶け込めていない	すぐにでも自宅に帰りたいと感じる	無回答
16名	30名	6名	5名	7名

義父母、夫、子ども、孫に対する言語選択すべてに対して、Kruskal Wallis検定を利用して、分析を行った。その結果、有意な結果がみられたのは、子どもに対するインドネシア語選択（3.0%）、子どもに対する日本語選択（4.6%）の2つであった。子どもに対するインドネシア語選択に関しては、親戚行事に溶け込んでいるインフォーマントの方が、選択割合が高く、子どもに対する日本語選択に関しては、あまり溶け込んでいないインフォーマントの方が、選択割合が高い傾向にあることが分かった。5．1で、インフォーマントの会話能力、とりわけインドネシア語能力と子どもに対する日本語選択には有意な関係がみられないことを明らかにしたが、会話能力よりも、インドネシア社会に対する適応の度合いの方が言語選択に大きな影響を与えていることが明らかになった。

5．4．日本・日本人との接触頻度

日本をどの程度の頻度、訪れているか、そして日本人（日系人を含む。以下同様）とどの程度交際しているかが言語選択に与えている影響を分析するためにアンケート調査の項目に加えた。結果として、有効回答をした49.1%のインフォーマントが1年に1回以上日本を訪れていることが分かった。また、友人の中に占める日本人の数は、インドネシアで仲の良い5人の友人を思い浮かべてもらい、その5人のうち何名が日本人であるかを回答してもらった。結果として、有効回答数53名のうち「5名」という回答が19名で最も多く、「0名」は0名、「1名」は3名と少なかった。つまり、訪日頻度も交際相手も非常に偏った回答となった。結果として、日本や日本人との接触頻度は、言語選択に対して統計的に有意な影響を与えていないことが分かった。

5．5．その他の要因（夫の出自民族）

その他の要因の中から、ここでは、夫の出自民族と言語選択の関係に関して分析したい。松尾(2003)によると、インドネシアでは、1966年から1998年まで続いたスハルト政権において、華人に対し数々の差別的な政策が実施されていた。例えば、マンダリン教育、公的な場で旧正月を祝うこと、中国語書籍のインドネシア国内持込などが禁止され、国立大学入学に関しても実質的な制限が加えられた。また、1974年、当時の田中角栄首相のジャカルタ訪問時に起こった反日運動において、その矛先は華人に対しても向

けられ、華人系商店への放火、略奪が行われた。さらに、1998年5月に起こった暴動においても、華人系商店への放火、略奪の他、多くの華人の殺害などが引き起こされた。現在でも、この暴動が心的外傷として残っている華人が少なくない。また、一般的に、華人はインドネシア国籍を所有していても、「オラン・チナ（＝中国人）」であり、「オラン・インドネシア（＝インドネシア人）」とはみなされないことが多い。そのため、インドネシア華人の中には、インドネシアと一定の距離を置いている人が少なくない。今回のインフォーマントの17名が華人と結婚している。これは、華人がインドネシアの総人口のわずか3％に過ぎないことを考えれば、高い割合と言えるであろう。そこで、夫が華人であるか、非華人であるかがインフォーマントの言語選択に何らかの影響を与えているかを分析、考察したい。

表7　夫が華人と非華人の場合における言語選択の相違

	インドネシア語	日本語	英　語
夫に対する言語選択	有意（0.5%） 非華人の方が高い	有意差なし （14.7%）	有意（0.1%） 華人の方が高い
子供に対する言語選択	有意（0.1%） 非華人の方が高い	有意（0.1%） 華人の方が高い	有意（4.6%） 華人の方が高い

表7は、Kruskal Wallis検定を行った結果である。夫に対する言語選択、子どもに対する言語選択、いずれにも夫が華人であるか否かが大きな影響を与えていることが明らかになった。夫が非華人である方が、インドネシア語を選択する割合が高く、華人である方が日本語や英語を選択する割合が高いことが分かった。

筆者の知人に「また暴動が起きたらインドネシアを必ず出て行く」と公言している華人がいる。実際に、アメリカやオーストラリアの永住権を取得している華人、取得しようとしている華人、資産をシンガポールの銀行に移している華人が多い。また、経済的余裕のある華人の多くは、子どもを英語圏の大学に留学させているし、卒業後もインドネシアに戻ってこない華人が少なくない。インドネシア華人は足場をインドネシアだけではなく、海外にも持とうとしているのである。インドネシアにおける立場の危うさとその危うさゆえの危機管理方略としての外国語習得・選択に対する積極的な意識が華人の言語選択に影響を与えていると言えるのではないだろうか。言語選択は基本的に個人的行為であるが、あるコミュニティが置かれた社会的状況においても大きな影響を受けるものであることが、華人と結婚したインフォーマントの言語選択からうかがえる。

6　まとめと今後の課題

本稿においては、インドネシア日系人の言語選択の実態とその要因に関して、量的な分析を試みた。結果として、日系人の家庭内における言語選択に大きな影響を与えているのは、「夫の日本語の会話能力」、「親戚行事に溶け込んでいるか」、「夫が華人であるか否か」の3点であることが明らかになった。そして、この3点すべてが統計的に有意な影響を与えているのは、子どもに対するインドネシア語の選択割合であった。

表8　言語選択（子どもに対するインドネシア語選択）に影響を与えている主要な要因

夫の日本語の会話能力	親戚行事に溶け込んでいるか	夫が華人であるか否か
会話能力が高いほど、選択割合が低い	溶け込んでいるほど、選択割合が高い	華人であれば、選択割合が低い

表8は、この3つの要因と子どもに対するインドネシア語の選択割合の関係をまとめたものである。夫が日本語の会話能力の高い華人で、親戚行事に溶け込むことができない日系人女性は、子どもに対するインドネシア語の選択割合が低い。一方、夫が日本語の会話能力の低い非華人で、親戚行事に溶け込んでいる日系人女性は子どもに対するインドネシア語の選択割合が高い。

今後の課題としては、インフォーマントの対象を広げていくこと、及び、量的分析に質的分析を加えていくことである。インドネシア日系人としては、本稿で取り上げた人々の他にも、脚注3で述べた通り、インドネシア在住日本出身男性、バリ島在住の日系人、元日本兵の子ども、孫たち等が存在する。インドネシア日系人の言語選択の多様な実態を把握するためには対象拡大の必要があるだろう。また、本稿では、言語選択の実態に関し、アンケート調査の結果に基づく量的分析を中心に行ったが、インタビュー調査で得たインフォーマント個々の細かい言語選択の実態やその要因に関するデータを分析の対象にすることができなかった。今後は、インタビュー調査の結果を分析、考察するとともに、さらにインタビュー調査を行っていきたい。

主要参考・引用文献

舟田京子（1997）.「インドネシアの言語と文化」、小野沢編、『ASEANの言語と文化』高文堂出版社　pp.73-107.

松尾　慎（2001）.「ブラジル日系人の言語使用」、野呂・山下編、『「正しさ」への問い』三元社　pp.149-182.

松尾　慎(2003).『インドネシア華人社会における言語シフトと言語選択』. 大阪大学大学院言語文化研究科博士論文

ACTFL. (1987). "ACTFL Japanese Proficiency Guidelines" *Foreign Languages Annals Vol.20, No.6, 1987*, pp.589-596.

Gal, S. (1979). *Language Shift*. New York: Academic Press.

Li, W. (1994). *Three Generations Two Languages, One Family*. Clevedon: Multilingual Matters.

参考統計資料

Penduduk Indonesia, Hasil Sensus Penduduk 2000, Biro Pusat Statistik

Penduduk Indonesia, Hasil Survei Penduduk Antar Sensus 1995, Biro Pusat Statistik

参考ホームページ

日本外務省ホームページ（2003年2月21日検索）

http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/02/2.html

http://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/tokei/hojin/02/3_1.html#2